



勉強をすることの意味とは

黒竜江省・ハルビン市朝鮮族第一中学 高2（男）

金 正瀚

現代の中国は学歴重視社会なので、受験競争は非常に厳しいです。こうした過当競争がもたらすストレスは小学校入学時から早くも子供達を苦しめています。僕もその子供の一員で小学校の時から「勉強する意味はいったい何だろう?」と思い、「勉強は僕に何を与えてくれるか?」と相当考えています。

僕も中国のほかの一人っ子世代と同じように親達の唯一の希望でした。そこで父親は小学校一年生から僕に大きなプレッシャーをかけながら勉強を押しつけました。僕が一年生の時から父親は僕の勉強に対していつも厳しかったです。毎日毎日、僕は夜12時まで起きて勉強しました。もちろん、夜1時、2時まで起きていたこともあります。まだ小学生なのに僕は基本的な睡眠時間も足りませんでした。休日の土、日曜日には二つの塾にも通いました。僕は勉強が嫌いになりました。勉強のせいで、僕は毎日夜遅くまで起きていなければならないと思っていたからです。時には父親に殴られ、泣きながら勉強しました。その時、まだ小さかった僕は勉強を憎みました。勉強することが怖くなりました。だから、小学生の時、成績が良かったですけど、その生活はとても辛かったです。その時の僕は父親の人形のように暮していました。しかしその生活にも終わりがやっと訪れました。小学校四年生の時、急に親達は何故か勉強のことに口を出さなくなりました。たぶん僕にがっかりしたのかも知れません。もしかしたら諦めたのかも知れません。その時から、勉強から解放された僕はまったく忘れたかのように毎日遊んでいました。僕の頭には一日中ゲームのことしかありませんでした。毎日わがままに過ごし、以前にはなかった快楽を感じました。毎日授業で眠くなったのも勉強のせいではなく、毎日ゲームを遅くまでやっていたからです。そして僕の中学生時代はゲームに夢中になっているうちに終わりました。父親の押しつけがない勉強は何からやればいいのかも分からなかったなので、ゲームに熱中しました。

そして、やっと僕は高校生になりました。

高校生になって最初、僕は以前のように遊んでばかりいました。「勉強はいつでもいいから、今は遊ぼう！」とあって、高校の最初から中学生の時と同じように無駄に過ごしていました。その時、僕は何をすればいいかも分からなくなりました。そんな僕は周りの友達が一生懸命勉強するのを見ても構わずゲームにのめり込みました。高校二年生になって、僕は新しいクラスに入り、新しい担任先生と出会いました。先生は「今度のテストで50点以上伸ばした人に褒美を与えよう。」とおっしゃいました。小さい子供のように僕はその褒美がほしくて勉強を始めました。その時、僕は生まれて初めて自ら進んで勉強がしたくなりました。そして、僕はそのテストで本当に60点以上も伸ばしました。僕もまったく信じられませんでした。そのテストで、僕はクラスで3位になり、学年でも8位に入りました。いつも成績が良くなくて、先生に叱られていた僕がこんな成績を取ったなんて、信じられなかったんです。心の底から熱いものがこみ上げてきて、心にかたまっていた堅いものを溶かしてくれたようでした。テストの成績が出た後、父親と久しぶりに顔を合わせて話し合うことになりました。父親は謝るとか褒めるとか何もませんでした。ただ「お前の成績はお前が自分の力で取った成果だ。良くやったな、これからも頑張れ。」と言って、褒美として100円を僕にくれました。父親の背中を見ながら僕は現代の社会で、親達は子供の教育問題に対していかにして心の安寧を得ているのだろうかと考えました。担任先生からのご褒美、父親からのご褒美、僕はただその褒美の為に勉強したくなったのか、それとも本当は心の中ではずっと前から勉強したかったのか自分でも分からなくなりました。

今回から、僕は初めて勉強というものは怖くて苦しいだけではなくて、面白いところもあるんだということが分かりました。勉強は自分から進んで取り組んでこそいい成績につながるのだと思っています。父親が僕に過度の期待を持たなくなり、知識をつめこませなくなったからこそ勉強の楽しさが分かったのだと思います。

人は自分がやりたくないことでもやらなければならないことがたくさんあります。だから、やらなければならないなら好きになるしかありません。勉強でも何でも好きになってこそ必ず上手になります。勉強は他の人にしつけられながらするものではありません。好きだからこそ意味があります。